当科における最近8年間の入院患者統計

長谷川智彦・鈴木 八郎・稲村 博雄・原田 浩二*
 戸島 均*・横山 壽一*・原田 次郎*・酒井 仁*
 布施 健生*・大木 誠*・前山 裕之*・奥山 孝*

Statistics of Inpatients in Our Clinic during the Last 8 Years

Tomohiko Hasegawa, Hachiro Suzuki and Hiroo Inamura
 (Yamagata Prefectural Central Hospital)

Koji Harada, Hitoshi Tojima, Juichi Yokoyama, Jiro Harada,
 Masashi Sakai, Takeo Fuse, Makoto Ohki,
 Hiroyuki Maeyama and Takashi Okuyama
 (Yamagata University)

The statistics of 2,014 inpatients (1,205 males and 809 females) in Yamagata Prefectural Central Hospital, Department of Otolaryngology, between 1983 and 1990 are presented. The age distribution showed that the patients in their fifties constituted the largest group among the inpatients. The location of diseases was the nasal cavity and paranasal sinuses in 470 cases (23.3%), the pharynx in 387 cases (19.2%), the larynx in 321 cases (15.9%), the ear in 289 cases (14.4%), the neck in 129 cases (6.4%), the salivary glands in 121 cases (6.0%), 52 in the oral cavity and tongue (2.6%), the trachea and esophagus in 20 cases (1.0%) and the other regions in 98 cases (4.9%). The number of facial palsy was 127 (6.3%). Since 1985, the number of inpatients has decreased, mainly because of a decreased number of inflammatory cases such as chronic sinusitis and chronic tonsillitis. There were 217 cases with malignant tumors of head and neck.

Key words: statistics, inpatient, location of disease

はじめに

山形県立中央病院耳鼻咽喉科における最近8年間(1983年1月より1990年12月まで)の入院患者の統計的観察を行ったので報告する。今回の統計では同一疾患による再入院を除いて、新入院症例だけを対象とした。

結 果

1. 年度別分布
 新入院患者総数2,014人中, 男性1,205人(59.8%), 女性809人(40.2%)で, 男女比は1.5:1であった。年度別入院患者数は図1のごとく, 1984年以降減少したが, 1987年以後は

年間約210人前後とほぼ一定状態が続いている。

2. 年齢別分布

年齢別入院患者数を図2に示す。50歳代が361人(17.9%)と最も多く、30歳以上60歳未満が50.5%と約半数を占めていた。10歳代のみ女性が多いが、他の年齢層は男性が多かった。80歳以上の高齢者は31人(1.5%)であった。

3. 疾患部位別頻度

図3に各年度及び全症例における疾患部位別

頻度を示す。全体では鼻・副鼻腔疾患が470人(23.3%)と最も多く、次いで、咽頭疾患387人(19.2%)、喉頭疾患321(15.9%)、耳疾患289人(14.4%)の順であり、この4つ部位で72.8%と全体の約3/4を占めていた。図のごとく、年度により多少のばらつきを認めるが、近年、鼻・副鼻腔疾患と咽頭疾患が減少している傾向にあった。他の部位の疾患に関しては大きな変

図1 年度別入院患者数

図2 年齢別入院患者数

図3 疾患部位別頻度

化はなかった。

4. 各部位における年齢分布と疾患及び手術頻度

1) 耳疾患

年齢分布では、10歳未満が57人(19.7%)と最も多く、次いで30歳代(16.3%), 10歳代(15.9%)の順で男女比はほぼ1:1であった(図4左)。耳疾患289人の内訳は、慢性中耳炎を主とした炎症が97人(33.6%)と最多で、以下真珠腫、突発性難聴、先天性耳瘻孔、メニエール病、外傷の順であった(図4右上)。耳疾患の手術件数は218件で、鼓室形成術が98件(45.0%)と最も多く、次いで中耳根本手術、耳瘻孔摘出術、中耳腔内チューブ留置術の順であった(図4右下)。

2) 鼻・副鼻腔疾患

50歳代が110人(23.4%)とピークを示し、30歳以上70歳未満が77.7%と約3/4を占め、男女比は2.1:1であった(図5左)。鼻・副鼻腔疾患470人の疾患別内訳は、慢性副鼻腔炎を主とする炎症が241人(51.2%)と約半数を占めていた。次に術後性頬部嚢胞などの嚢胞性疾患が続ぎ、以下鼻出血、腫瘍の順であった(図5右上)。

手術件数は571件で、症例数よりもかなり多くなっているが、これは両側性に手術を行った場合、鼻内手術以外は左右各々1件として算定したためと、悪性腫瘍の中には数回にわたって手術をした例があるためである。上顎洞篩骨洞根本手術232件(40.6%)と最も多く、次いで篩骨洞鼻内手術、悪性腫瘍の手術の順であった(図5右下)。

3) 咽頭疾患

10歳未満と20歳代にピークがあり、各々80人(20.7%)であった。次いで30歳代、10歳代の順であり、40歳未満が77.3%と3/4以上を占め、男女比は、1.9:1であった(図6左)。咽頭疾患387人の内訳は、慢性扁桃炎とアデノイド増殖症を主とする炎症が334人(86.3%)で大部分を占め、次に腫瘍48人(12.4%)の順であった(図6右上)。手術件数363件中、口蓋扁桃摘出術とアデノイド切除術が344件(94.7%)とそのほとんどを占めていた(図6右下)。

4) 喉頭疾患

年齢分布をみると、全体的には40歳代から50歳代にピークがあり、男性のピークが50歳代にあるのに比べ、女性のピークは30歳代にあった。

図4 耳疾患における年齢分布と疾患・手術頻度

男女比は2.2:1であった(図7左)。喉頭疾患321人の疾患別内訳は、喉頭ポリープ(ポリープ様変性を含む)が201人(62.6%)と最多で、次いで腫瘍75人(23.4%)、炎症の順であった

(図7右上)。喉頭疾患の手術件数は284件で、顕微鏡下喉頭手術が262件を占め、その内39件(13.7%)が悪性腫瘍の手術であった。次いで喉頭全摘術が18件(6.4%)であった(図7右

図5 鼻・副鼻腔疾患における年齢分布と疾患・手術頻度

図6 咽頭疾患における年齢分布と疾患・手術頻度

下).

5) 唾液腺疾患

20歳代から40歳代に患者が集中しており, この年代層で67人 (55.4%) であった. 男女比はほぼ1:1であったが, 20歳未満及び60歳以上では女性に多い傾向を示した (図8左). 唾液腺疾患121人の疾患別内訳は, 腫瘍が64人 (52.9%) と最多で, 次いで炎症41人 (33.9%),

ガマ腫16人 (13.2%) の順であった (図8右上). 手術件数は107件で, 耳下腺腫瘍摘出術が41件 (38.3%) を占め, 次いで顎下腺摘出術が26件 (24.3%), 顎下腺腫瘍摘出術とガマ腫摘出術が各々17件 (15.9%), 唾石摘出術6件 (5.6%) であった (図8右下).

6) 舌・口腔疾患

70歳以上が17人 (32.7%) と最多で, 次いで50

図7 喉頭疾患における年齢分布と疾患・手術頻度

図8 唾液腺疾患における年齢分布と疾患・手術頻度

歳代と60歳代が各11人（21.1％）で、50歳以上が39人（74.9％）と約3/4を占めていた。男女比は1.7：1であった（図9左）。舌・口腔疾患52人の内訳は腫瘍が37人（71.2％）と最多で、次いで炎症7人（13.5％）、外傷5人（9.6％）であった（図9右上）。手術件数は53件で、悪性腫瘍手術が30件（56.6％）を占め、次いで良性腫瘍摘出術が15件（28.3％）であった（図9右

下）。

7) 頸部・甲状腺疾患

年齢分布は50歳代が27人（20.9％）と最も多く、次いで40歳代26人（20.2％）、30歳代22人（17.0％）、60歳代20人（15.5％）で、男女比は1：1.5と女性が多かった（図10左）。頸部・甲状腺疾患129人の内訳は、腫瘍が82人（63.6％）と最多で、次いで炎症と嚢胞が各々23人（17.8

図9 舌・口腔疾患における年齢分布と疾患・手術頻度

図10 頸部・甲状腺疾患における年齢分布と疾患・手術頻度

%)であった(図10右上). 手術件数は185件で疾患数を大きく上回っているが, これは他部位の悪性腫瘍に対して行った頸部郭清術や頸部リンパ節摘出術が含まれているためである. 頸部郭清術が55件(29.7%), 甲状腺腫瘍手術が50件(27.0%), 頸部リンパ節摘出術31件(16.8

%), 嚢胞摘出術23件(12.4%), 良性腫瘍摘出術12件(6.5%)であった(図10右下).

8) 気管・食道

年齢分布は10歳未満が11人(55.0%)と圧倒的に多く, 次いで70歳代4人(20.0%)で, 男女比は1.5:1であった(図11左). 疾患別内訳

図11 気管・食道疾患における年齢分布と疾患・手術頻度

図12 顔面神経麻痺における年齢分布と疾患頻度

は、異物が13人(65.0%)と最多で、次いでカニューレ抜去困難症5人(25.0%)であった(図11右上). 手術件数は43件で、気管切開術16件(37.2%), 食道異物摘出術11件(25.6%), カニューレ抜去困難症に対する肉芽除去術や気管孔開大術6件(14.1%), 気管支異物摘出術5件(11.8%)であった(図11右下). ここに示す気管切開術の件数は当科入院患者中で、呼吸管理の必要上行った件数だけを示したもので、他科よりの依頼で行ったものは含まれていない.

9) 顔面神経麻痺

50歳代が29人(22.8%)と最も多く、次いで30歳代26人(20.5%), 40歳代21人(16.5%)の順で男女比は1.2:1であった(図12左). 顔面神経麻痺127人の内訳はベル麻痺が103人(81.1%) ハント症候群22人(17.3%), 外傷性2人(1.6%)であった(図12右上).

10) その他

上記疾患部位に含まれないその他の疾患は98人で、その内訳は耳性以外のめまいが85人(86.7%)と圧倒的多数を占め、40歳代から60歳代の女性に多かった. 他は頭部・顔面外傷, 多発性神経炎などであった.

5. 悪性腫瘍

この期間の悪性腫瘍患者数は217人で、全入院患者数の10.8%を占めていた. その部位別内訳を図13に示す. 多い順に、喉頭75人(34.6%), 咽頭37人(17.1%), 鼻・副鼻腔30人(13.8%), 頸部・甲状腺25人(11.5%), 舌・口腔22人(10.1%), 悪性リンパ腫13人(7.8%), 唾液腺5人(4.2%), 聴器2人(0.9%)であった.

図13 悪性腫瘍部位別頻度

(10.1%), 悪性リンパ腫17人(7.8%), 唾液腺9人(4.2%), 耳2人(0.9%)であった. 平均年齢は63.5歳で、70歳代が49人(22.6%), 80歳以上が21人(9.7%)であった.

考 察

1983年より1990年までの8年間の新規入院患者2,014人について統計的観察を行い、入院患者動態を検討した.

1984年を境にして入院患者数が減少しているが、この要因としては、他施設でも報告^{1)~3)}されているように、慢性副鼻腔炎と慢性扁桃炎患者の絶対数の減少が考えられる. さらに、1984年前後に当院の診療圏内における他施設において、耳鼻咽喉科が開設されたり人員増加補強などが行われたため、慢性副鼻腔炎や慢性扁桃炎などの炎症性疾患は、多数の施設に分散している可能性が高く、患者数が相対的に減少しているとも考えられる.

入院患者の男女比は1.5:1で他施設の報告とはほぼ一致していた. 年齢別分布をみると、10歳未満が他施設に比べ少ない傾向にあったが、当院では頭頸部領域の先天性奇形などは形成外科で加療しているためと考えられる.

疾患部位別でみるといくつかの特徴が認められた. 喉頭疾患の年齢分布をみると、30歳代までは男女差が認められないが、40歳代以上では男性の占める割合が圧倒的に多くなっている. これは喉頭悪性腫瘍が60歳代から70歳の男性に圧倒的に多いためと考えられる. 舌・口腔疾患の年齢分布をみると、50歳以上が約3/4を占め、70歳代にピークがあり、かなり偏った分布を示している. これはこの領域で入院対象となる疾患の大部分が腫瘍性病変で、しかも悪性腫瘍の占める割合が高いためと考えられる. 頸部・甲状腺疾患では男女比が1:1.5であり、唯一女性が多かった. これは甲状腺腫瘍が女性に多いためと思われる. 気管・食道疾患でも特徴的な年齢分布を示していた. すなわち、10歳未満(厳密には2歳以下)と70歳以上の2つにピークを示した. この領域の入院対象疾患の大部分

が異物症であり, 気管支異物は1歳前後に集中し, 食道異物は幼児と高齢者に多いためと考えられる。

我が国の高齢化社会を反映するかのように, 頭頸部悪性腫瘍患者の高齢化現象が報告されている⁴⁾⁵⁾。当科での最近8年間の頭頸部悪性腫瘍患者217人の平均年齢は63.5歳で, 70歳代が49人(22.6%), 80歳以上が21人(9.7%)であった。以前の当科の報告⁶⁾⁷⁾によれば, 喉頭癌及び副鼻腔癌いずれにおいても, 70歳以上が37~38%を占め, 5年前にすでに高齢化が認められていた。最近では平均年齢には大きな変動はないが, 80歳以上の高齢者が増加傾向にあり, しかもこの年代層の予後が悪い事より, 今後益々高齢化社会が進めば, 頭頸部悪性腫瘍の治療や予後に影響を与えることが示唆された。

ま と め

最近8年間の入院患者の2,014人の統計的観察を行った結果, 以下の結論を得た。

1) 男女比は1.5:1で男性に多く, 50歳代にピークを認めた。

2) 入院患者数の減少を認めるが, 慢性副鼻腔炎と慢性扁桃炎の減少が原因と考えられた。

3) 疾患部位別頻度は, 鼻・副鼻腔(23.3%), 咽頭(19.2%), 喉頭(15.9%), 耳(14.4%), 頸部・甲状腺(6.4%), 顔面神経麻痺(6.3%), 唾液腺(6.0%), 舌・口腔(2.6%), 気管・食道(1.0%)の順に多かった。

4) 頭頸部悪性腫瘍患者は217人で, 喉頭

(34.6%), 咽頭(17.1%), 鼻・副鼻腔(13.8%), 頸部・甲状腺(11.5%), 舌・口腔(10.1%), 悪性リンパ腫(7.8%), 唾液腺(4.2%), 聴器(0.9%)であった。平均年齢は63.5歳で, 70歳代が49人(22.6%), 80歳以上が21人(9.7%)であった。

文 献

- 1) 仲神みつ子, 藤林慶子, 堀 瑞代, 他: 当科における最近5年間の入院患者の統計的観察. 耳鼻臨床 **78**: 1334~1340, 1985.
- 2) 竹内和郎, 大槻好正, 大谷 巖: 当教室28年間の入院患者統計. 耳鼻臨床 **78**: 999~1007, 1985.
- 3) 志賀伸之, 小林俊光, 高坂知節: 東北大学耳鼻咽喉科における入院患者統計とその推理. 耳鼻臨床 **80**: 1719~1728, 1987.
- 4) 宮崎 洋, 松村祐二郎, 野村 和, 他: 高齢頭頸部癌患者の動向とその取り扱いについて—その1. 手術を中心に—. 耳鼻 **83**: 51~55, 1987.
- 5) 佐藤武男: 喉頭癌—その基礎と臨床—第2版. 22~29頁, 金原出版, 東京, 1986.
- 6) 戸島 均, 鈴木八郎, 大竹欣哉: 副鼻腔癌, 過去10年の治療成績, 山形県病医誌 **18**: 30~34, 1984.
- 7) 長谷川智彦, 鈴木八郎, 大竹欣哉: 喉頭癌の治療成績—最近10年間の61症例について—. 山形県病医誌 **19**: 193~197, 1985.

(別刷請求先: 長谷川智彦
〒990-23 山形市桜町7-17
山形県立中央病院耳鼻咽喉科)